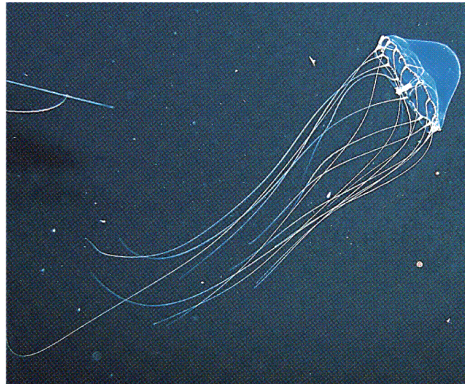
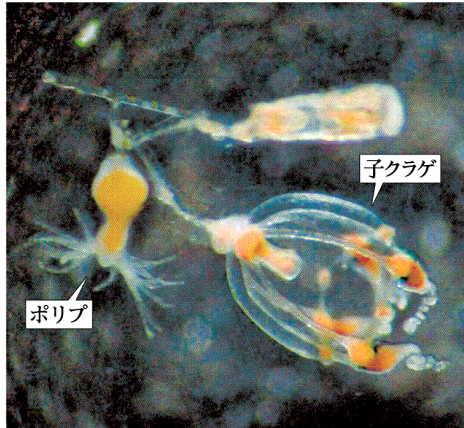




ガラスのように透明な傘が特徴のギヤマンクラゲ

ギヤマンクラゲ

学名 *Tima nigroannulata*

分類 軟クラゲ目マツバクラゲ科
大きさ 傘の直径4センチ
分布 新種の確認は宮城県から宮崎県までの太平洋岸側

食べ物 イサザアミ類
特徴 岩などに付いたポリプの一部に子クラゲができ、海中に泳ぎだす。子クラゲは成長するにつれて触手の数が増えていき、成熟した個体では50本以上の細長い触手を持つ。傘の縁には黒い色素がある。日本沿岸では春から夏に現れる。「ギヤマン」とはオランダ語の「ガラス」のように透明という意味で、その名のとおり、傘は透き通っている。

6月に新種を発見

クラゲ飼育担当になるとまず初めに任されるのが、ギヤマンクラゲの飼育管理です。次々と子クラゲが水槽の中に出てきて、手間をかけた分だけすくすく育っていく様子

に、飼育の面白さを次第に感じるようになる入門的な存在でもあります。寿命は数カ月程度ですが、子クラゲの元となるポリプの管理が良ければ、増やすこと

は難しくなく、かごしま水族館では1年を通して展示しています。日本各地の水族館で展示される定番のクラゲでしたが、6月、加茂水族館（山形県）と新江ノ島水族館（神奈川県）、海外の研究者らの共同研究によって、実は新種であつたことが報告されました。

おもしろ生き物図鑑 かごしま水族館から

日本で見られるギヤマンクラゲは1925年に初確認されたから現在にいたるまで、北アメリカで見られるものと同じ種だと考えられてきました。研究チームが日本の太平洋側各地で採集したクラゲの遺伝子を解析し、体の特徴を詳しく観察してみたところ、新種であることが分かったのです。和名はそのままだに、この新種には新たな学名が付きましました。

日本に現れるギヤマンクラゲがすべて新種であるかどうかはまだ明らかになっていません。鹿児島県に出現するギヤマンクラゲはどちらの種なのか、今後の出会いが楽しみです。

（魚類展示係・土田洋之）